

Title	イギリス女子教育のフェミニズムと植民地の意味
Author(s)	堀内, 真由美
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46569
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	堀内真由美
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19943 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	イギリス女子教育のフェミニズムと植民地の意味
論文審査委員	(主査) 教授 藤川 隆男 (副査) 教授 竹中 亨 教授 秋田 茂

論文内容の要旨

本論文は、イギリス女子中等教育とフェミニズムの関連を、従来詳しく研究されることの少なかった 20 世紀前半を中心に検討することで、教育を担った女性教育者にとってのフェミニズムの影響とそれへの不当な非難の存在を明らかにする一方で、彼女たちの帝国意識にも着目し、帝國的な規模での女性教師のネットワークの存在とアフリカ植民地政策との係わりを明らかにした、注目すべき論考である。本文は 400 字詰め原稿用紙約 400 枚からなり、3 章と序論および結論部分にわかれている。内容的には、以下の三つの問題を検討するかたちで、議論がすすめられている。すなわち、①女子中等教育とフェミニズムの関連、②白人が多数を占める植民地への女性教師ネットワークの拡大、③アフリカにおける女子中等教育の展開、がそれである。

これらの問題の検討作業を通じて、本論文は、次のように結論する。ペニー・サマーフィールドらが主張するように、19 世紀末から 20 世紀大戦間期のイギリス女子中等教育は、第 1 波フェミニズムの理想を内包していた。女性教育者は、男性中心社会の被抑圧者として、差別的待遇を改善しようとするフェミニスト的側面を持っていたのである。実際に女子中等教育の現場では、男子校並みを目指すことで、「脱ジェンダー化」が進展していた。キャロル・ダイハウスらの女子別学教育の保守性に対する批判は的外れであり、このような批判が起こる原因の 1 つは、実際の検証なしに、女子別学教育を閉鎖的な階級性を有する良妻賢母の育成場であると、即断したところにある。このような既成観念のもとには、男女共学を革新的であるとする戦間期に形成されたイメージがあった。戦間期に、この「男女共学優位」論が歴史的に形成される過程で、女子別学中等教育に対するセクシュアリティ批判が、男女の共学を「自然な形態」、女子別学中等教育を「不自然なもの」として否定的にとらえる心性を生み出していた。

すでに多くの研究者が指摘するように、女子中等教育の階級性は明らかであるが、同時に、女性教師たちは、「帝国意識」とそこから派生する「人種意識」も強く抱いていた。しかも、彼女たちの帝国意識は、フェミニスト的言動とも矛盾なく共存していた。

フェミニズムと帝国の親和性は、ミドルクラス女性の植民地移民を推進する 19 世紀後半の活動にすでに現れていた。移民協会は主にガヴァネスの移民を手助けすることで、中産階級の教育者を植民地に送り出していた。イギリスの女子中等教育が 19 世紀末に学力主義への傾倒とパブリック・スクール化するという変化を経験する過程で、本国の女性教師たちは白人植民地へと渡り、イギリスの女子教育を拡張した。女校長会と植民地情報連盟などの提携によって、ケンブリッジウーマン・ネットワークが帝国に拡大され、「教育を受けた女性の循環」が拡張したのである。

海外にわたった女性教師は、本国を優先する帝国意識を強く抱き、「ミッショナリー」として白人植民地での教育にあたっていたが、第1次世界大戦後は、これらの地域の自立傾向により、大きな壁に直面することになる。

本国と植民地における女子中等教育が直面した閉塞状況の打開のひとつの道が、アフリカのネイティブに対する女子教育に積極的に関与することであった。フェミニストであった女校長会の指導者が、植民地省の教育政策の立案や教育者の養成に加わり、ミッション団体などの協力もはかられた、と本論文は主張する。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の功績は、20世紀のイギリス女子中等教育を担った女教師たちとイギリス帝国との関連を明らかにしたことである。イギリス女子中等教育の中核にいた女教師たちが、フェミニズムの理想を内包しながら、それと矛盾することなく帝国意識を抱いて、帝国での教育に係わりをもった事実関係を解明したことは、フェミニズムの内包する白人性の解明を目指す近年の研究動向への重要な貢献である。

その他にも、日本のイギリスの女子教育史においては、河村貞枝や香川せつ子の研究が示すように、その創世期を扱う例が多かったが、これを20世紀に拡大し、その後の展開を扱ったことで新たな議論の土台を築いたという意義は大きい。さらに、戦間期の女子教育者へのセクシュアリティ批判が、後の研究者たちの思考様式に影響を及ぼしているという論点は興味深く、今後の研究の展開が期待できる。また、帝国の移民史の立場からすれば、帝国内の専門職の移民を支えるネットワークの存在が資料的に裏付けられたことは重要である。

もちろん、問題点がないわけではない。たとえば、論文の前半部分の国内史の展開が帝国との関連で十分に説明されていない。帝国を見る国内からの視点を中心に、植民地側の史料の利用が不十分である。戦間期の帝国の構造変化の取り扱い、帝国意識の実態把握が十分になされていない。1920年代の変化の局面を強調しているが、その原因についての言及が不足している、セクシュアリティの構造に関する議論に疑念が残るなど、今後の研究の課題も多い。しかし、これらの問題点は、限られた時間のなかで論文を完成するという制約のなかではしばしば生ずる問題であり、本論文の意義を損なうものではない。

本論文は、いくつかの問題点はあるが、博士論文としての一定の水準を満たしており、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。